日向の傳説

ひゆうが（ルビ）

小山文雄著

特109
967

始

日向の傳說

特109
967
帝國圖書館藏
大正
13.10.29
内交

再版にあたつて

神話や傳說をそのまゝ史實として受入れることの出來ないのは言ふ迄もない。

けれども私達はこうした神話や傳說の中から上代人の習俗や、思想や、宗敎觀念や、土地の推移變遷といつたものを抽出する事が出來る。私はこうした見地に於て神話や傳說を此上なく懷しいものに思ふ。

私はこうした見地から日向研究の傍、日向に於ける地方的傳說の蒐集を思ひ立つた。そして集め得たものゝ中から十數編を拔き傳說の價値を損せない範圍で多少の脚色を施して客年一月之を公刊した。然るに幸にも私のこの企ては大体に於て順潮に運び、本年に入つてからは再版に附せねばならないやうな都合になつてゐ

たのであるが、昨年の東京大震災は私のこの小さな事業にも影響して原版を燒失し、一時中止の止むなきに立至つてゐた處、茲に學窓を同じうする日高印刷所主日高光男君の好意によつて再版の機を得た事は誠に嬉しい事に思ふ。

再版には多少の增補を加へたが日向に於ける地方的傳說は尙少くない。私は版を重ぬるに隨つて追加してゆきたいと思ふ。

尙本書の再版に當つて最後ではあるが、私は先年拙稿を公刊するに際して多大の援助を辱うした前東京朝日新聞記者坂本正雄氏の厚意に對して重ねて謝意を表したいと思ふ。

氏は客年の大震災直後、合同通信社から四ヶ年間歐米留學の命を承けて、客冬北米に鹿島立つた Red Wood からの手紙を手にしたのは其の後間もなくであつた。

今は Red Wood で靜かに準備してゐる。君の仕事にどうか、春は多分 New York で迎へることにならう

こんな事が走り書きされてゐた。其の後一回私から手紙をやつたきりで消息はないが。不日私のこの拙い小冊子異鄕の地で、氏の手に屆いたらどんなに喜んで載けるだらうと、衷心嬉しく思ふ。

大正十三年八月

著者誌

目次

美々津のつき入團子（みゝつのつきいれだんご）……一
お金お倉ヶ濱（おかねおくらがはま）……一一
法華嶽藥師と彌陀如來（ほっけだけやくしとみだにょらい）……二〇
眞帆嫌ひの權現樣（まほぎらひのごんげんさま）……三一
海の幸山の幸（うみのさちやまのさち）……四一
炎えずの野火（もえずののび）……五一
伊福笠の花笠踊（いふくがたのはながさおどり）……六三
愛宕大權現の御利益（あたごだいごんげんのごりやく）……六九

權現樣の御化身……八二
狹野の仁王樣……八六
樫の木の怪……九〇
こがねの農具……九三
神女滿壽子と榎原樣……一〇〇
戀の鳥羽樣……一一〇
淚の片袖……一一三
白馬小町……一二六
逆鉾の崇り……一三九
戀の祖母樣……一四二

亡びゆく日向の傳說

美々津のつき入れ團子

兒湯郡の美々津港は、神武天皇御東征の御發船地として名高い處である。そして其の附近には、當時の傳說遺跡が數限りなく殘つてゐる。

畏れ多い事ではあるが、天皇がお立ちの儘、衣の綻びを縫はせ給ふたと傳へらるゝ立縫ひの里や、御腰掛けの岩、御船出の前、

其處をお通りになつて、髷をお解きになつたと傳へらるゝタブトキ峠など、いづれも意味深い傳説地でないものはないが、中にも美々津のつき入れ團子には、天皇にお別れを惜んだ、土民の盡きせぬ情緒さへ忍ばれて、別けても思出の深いものがある。

八朔の節句、それは天皇が美々津港を御船出になつた日である其の日には、美々津の町の、それも天皇の御通路であつたと傳へらるゝ御道筋に當つてゐる家々のみであるが、此れ等の家々では其の日に限つて、夜中から起出で團子をつくる習はしである。そしてその團子は、小豆と米の粉の蒸したものとを、臼にて搗き混せた、頗る變なものである。

宮崎の宮居を御出發になつた天皇は、暫し此の地に御足をお停めになり、從侍の者を督して、御船出の準備をお急ぎになつてゐたが、程經て、準備も全く整つたので、今は御發船の日を、お待ちになつてゐる許りであつた。

頃は陰暦七月の末、陰晴定めなき空の、降るかと思へば輝り、輝るかと思へば曇り、時に風さへ吹き荒んでは、御船旅の殊の外御心を惱まされ、雨の朝風の夕、濱邊に下り立たせられては、白波の立騷ぐ沖の模様に眼を止めさせ給ひ、或時は御自ら紙鳶をお

揚げになつて、刻々に變つてゆく風向を御覽遊ばさるゝなど、只管天候の恢復をお祈りになつてゐたが、天もいかでか、榮ゑある御征途を祝福せざるべき、數日の後、大空はカラリと霽れて微風徐ろに海面を渡り、水天一碧、海波搖がず、御船出には誂向きの好天氣となつた。

天皇はいたく御喜びになり、早速近臣をお召しになつて、明早朝を期して出船すべき旨仰出された。

ひつそりとした港の町が、急に色めき立つた、多くの人達が右往左往に馳せ廻つた。狹い港の中には、幾十の軍船が、林の樣に

並んでゐた。

明日はお立ちだそうな

土人達の間には、こうしたことが次々に傳へられた。

自分達は遠からず天皇にお別れせねばならぬのだ

それは土人達もとつくに承知し覺悟してゐる事なのであつた。けれどもそれが、愈々明朝であると聞いては、又新なる惜別の情のこみあげて來るのをどうする事も出來なかつた。

遠い〱海の彼方へ御旅立ちになる、そして又、いつお目に掛れるのか、それすら分らない

こう考へると、土人達は、刻々に自分達の手から、何物かを奪ひ去られる樣な氣がしてならなかつた。そして、荒瞭たる廣原に、只獨り、ゆき暮れてゐる樣な、淋しい氣分になつて、思はず淚ぐまれるのであつた。

時は刻々に移つてゆく、お別れの時が次第〳〵に迫つて來るのであつた。

悲んでばかりゐたつて仕樣はない、せめて長い御道中の御慰みに、何なりとつくつて差上げる事にしやうじやないか。

一人の男が思出した樣に言つた。皆のものも無論異議はなかつた。

そこで各戸から團子をつくつて差上げる事にした。それはもう暮近い頃であつた。

間もなく日はとつぷりと暮れた。漆を流した樣な闇の中に、牛のねそべつてでもゐるやうな、土人達の家々では、海から吹上げて來る涼風に、ともすれば吹き消されそうなカンテラの火を中にして家族中よつてたかつて、粉をひいたり小豆を煮たりして、是非明日のお立ちに間に合せやうと急いでゐた。

土民共は、天皇のお立ちはきつと夜が明けてからだと信じてゐた。

夜の明けるのにはまだ相當に間があつた。外は烏羽玉の闇で、大空には眠そうに星が瞬いてゐた。遠くの山里で、思出した様に鳴く鷄の音が、冷たい夜の空氣を搖つて、松原越しに夢の様に寄せ返つてゐる波の中に消ゑてゆく。土民共は尙も一生懸命に團子をこしらへてゐた。どの家もまだ戸は堅く閉してゐた。

すると間もなく、闇の中に、「起きよ〳〵」と叫びながら、戸毎を叩いて、起早やに過ぐる者があつた。間もなく

天皇のお立ちだ

と言ふ里人の叫びが、次から次に傳はつた。天皇は五色の七夕竹

をお持ちになり、戸毎を叩きながら、足早やに、港の方へ歩いてゐられた。

土民どもは、お立ちの餘りに早いのに驚いた。どの家でも、まだ團子を仕上げてゐる家はなかつた。土地の者共は周章狼狽いて餡こを中に包むひまもなく、小豆と米の粉とを搗き混ぜたものを差上げた。

これが今日、美々津の一部に傳はつてゐるつき入れ團子で、船出の日八朔の節句には、今でも御通路であつたと言はれてゐる道筋に當る家々では、この團子をつくり、其の日には町の子供達は

まだうす暗い中に起出で、七夕竹を持ち、戸毎を起きよ〳〵と叫びながら走せて通るのである。

　そして、御通路であつたと傳へられてゐる以外の家々では、神罰を蒙り腹痛を起すと言ふので、決してつき入れ團子をつくることはない。

お金お倉ヶ濱

　日豊線岩脇驛の東海岸、濱松三里、白砂遠く連つて、陸に松風の調も高く、海に千波萬波の寄せては返し返しては寄せ、千鳥浮べて鷗を乘せて、自然の歌節も面白う昔ながらに繰り返してゐる濱邊、其の濱邊をお金お倉が濱と呼んでゐる。

　青い海、凄い迄青い海、其の海の底深く、無限の蛤が棲息ゐて、遠い昔から今の世迄、漁つても漁つても、漁りつづけて見て

も、つい滅る模樣すらない。只それだけでも 奇しき事柄であるが、それは只お倉ヶ濱だけで、同じ磯傳ひのお金ヶ濱には影さへ見えないと聞いては、尙更に不可思議な事どもである。

遠い昔、濱の名さへ分つてゐなかつた頃には、お金お倉の二つの濱には共に夥しい蛤が棲んでゐた。

今日では、潮干狩の賑ひは、お倉ヶ濱だけにこそ見られるが、其頃には、お金ヶ濱の潮干狩もお倉ヶ濱に劣らぬ 賑ひであつた。

平岩の鼻を界にして、流れ殆ど二里にも近く、細島の鼻が、ぼ

つと霞んで見ゐる處迄とりこんでゐる二つの濱の波打際は、まるで黑い人影で埋れてゐた。その黑い人垣が、波の間に〳〵、小さく太く搖れると、其の都度、蛤漁る人達のどよめきが、流れ幾里の汀を壓した。磯傳ひに旅する人も足を止めて打ち興じた。

其頃の事、濱邊に近いとある村に、お金と呼ぶ女が住んでゐた生れつき大の吝嗇で、人に施す事は大の嫌いであつた。

或日の事、お金は只一人、手籠を提げて、ぶらりと濱邊に下り立つた。每も蛤漁る人の群れ集ふ濱邊には、其日に限つて、まだ他に人の影は見えなかつた。

お金は邊りに人のないのを幸ひ、急いで蛤を漁り廻つた。一つ又一つ、其都度、お金は微笑んだ。三つ四つ五つ、お金はもう無中で漁つてゐた。

すると其處に、行脚姿の風體こそ賤しいが、黒く眞一文字にはねた眉、底光のする眼ざし、引き締つた口元、どこかに犯し難い氣品の具はれる旅僧一人通り懸り、側目もふらず蛤を漁つてゐるお金を見て、つか〳〵と其の側に進み寄り

其の蛤を我れに惠み給はずや

と呼び掛けた

不意を喰つたお金は、驚いて振り返つたが、急に素知らぬ振りを裝ひ、素早く蛤を押し隱し

石のみなれば

と、素氣なく斷つた。

旅僧は默して去つた。

お金は、汀に沿ふて北へ〳〵と歩き去る旅僧の姿を、暫しの間見守つて居たが後姿が次第に遠ざかつてゆくと、再び蛤を漁りつづけた。

旅僧は、お金の無慈悲な仕打ちに騷ぎ立つ胸を、美しい濱松原

や、鷗群れ飛ぶ沖の眺めに紛しながら、讀經口ずさみつゝ、灯傳ひに歩いてゐたが、ふと行く手に、又も女一人、頻りと蛤を漁つてゐるのが、目にとまつた。

旅僧は又もつか／＼と女の方に歩き寄つた。そして、さつきお金に呼び掛けたと同樣

其の蛤を我れに惠み給はずや

と言葉を掛けた

其の女は、ついこの濱近くに住んで居るお倉と呼ぶ者で、以前のお金とは打つて變つて氣立優しく憐み深くして、お金を野薔薇

に見立るならば、お倉は谷間の白百合にも例へたい優しい心の持主であつた。

お倉は蛤漁る手を急に止め、身形を正して旅僧に向ひ

心易き御望み、いざとらせ給へ

と、漁り得た蛤全部をおしげもなく差し出した。

旅僧は、いかにも滿足の面持で、お倉が差し出す蛤をば貰ひ受け、厚く禮を述べて、立去らうとしたが、ふと思ひ出した樣に振り返り、お倉に向つて其の名を問ひ

さても／＼情深き御方かな、御身の心根は必ずや天に通じ、此

の濱には未來永劫、蛤の絶ゆる事はなかるべし、濱の名は御身の名に因んで、お倉ヶ濱と名付くべし

とて立去つた。

お倉は無言の儘、不審な旅僧の行方を見守つた。

こうした事實があつてから、月日の小車は廻り廻つて、かれこれ千年餘りにもなる。そして、今日尚、お倉ヶ濱の磯傳ひに、蛤漁る人の群を見ぬ日とてはないが、不思議にも蛤の減る模樣すらない。

それに引きかへ、無慈悲なお金が、素氣なく旅僧を追ひ立てた

濱邊には、その事があつて以來、ふつつりと蛤が跡を絶ち、お倉ヶ濱の濱つゞきでありながら、今に蛤の影すら見ゑない。

土地の人は此の濱をお金ヶ濱と呼んでゐる。

法華嶽藥師と彌陀如來

昔、東諸縣郡綾在、法華嶽の山麓に近い狩野の里に、長喜と呼ぶ男が住んでゐた。又、程遠からぬ、川中嶽の山麓狩果の里には明久と呼ぶ男が住んでゐた。

長喜明久の二人は、どちらも獵師で、毎日〳〵、弓矢を携へては、法華嶽川中嶽の山深く分け入つて獵物を漁り、猪や山鳥を捕つては、やう〳〵の事で妻子を養つてゐた。

或る日のこと、二人は、毎もの通り、連れ立つて威勢よく獵に出掛けた。そして、あそこの谷間ここの森蔭と、終日駈け巡つて獲物を漁つたが、どうしたものか、其の日は小鳥一羽さへ射止める事は出來なかつた。二人はがつかりして歸途についた。

明くる日二人は、毎もより早く家をとび出し、今日こそはと、草を分けて漁り廻つたが、其の日もとう〳〵無駄に終つた。

其の明けの日も、明けの日も、とう〳〵獲物は手に入らなかつた。

打ちつづく不獲に、今は糊口の途さへ途絶え、妻子は飢えに泣

く有樣に、はたと當惑した二人は此上は山の神樣にお願ひ申し、獲物を授けて頂くより他に途はないと考へ、それ以來每日〱、一心に山の幸を神樣にお祈りした。けれどもどうしたものか、獲物は全くなかつた。

靈龜二年十二月八日、二人は石佛の在す釋迦ヶ嶽の奥深く分け入つて、方々獲物を漁つた揚句、每もの通り一心に祈願を籠めてゐた。

日脚の短い冬の日は、いつの間にか山の端に落ちて、夜の幕か遠くの山から、麓の村から刻々に迫つて來た。入相告ぐる山寺の

鐘の音が、野を越え谷を越えて、風の間に〱吹き送られて來る。けれども二人は、其處を立ち去らうとする氣配さへ見えなかつた。

間もなく、夜の幕は天地の一切を蔽ひつくした。遠い山里に明滅する燈火が、幽幻の國を夢みる樣に哀れを誘ふ。けれども二人は身動きもしなかつた。

夜は次第に更けてゆいた。更くるにつれて、葉末を渡る山風はひどく身に凍んで來る。

二人は尙も祈願を籠めてゐたが、いつの間にか、連日の疲れに

其の儘とろ〳〵と眠りに落ちた。

葉末を渡る山風がハタと止んだ。全山の草木チラともせず、霜の置く音さへ聞かるゝ深山の眞夜中、夜寒のまゝに、二人の夢は破れた。

途端！

風もないのに、バラ〳〵ッと木の葉の落つる音して、怪しと思ふ間もなく、兩人の前に、御佛が立ち顯れ給ふた。

兩人は吃驚して二三歩飛び下がつた。そして其の儘其處に平伏した。

佛は、恐れ戦く兩人の者を前にして、徐ろに宣ふ樣

汝等二人、殺生を業とし、明け暮れ此の深山に分け入つて禽獸を狙ひ、今日迄既に、九百九十餘宛を射止めてゐる。千に達するも後僅である。殺生の罪眞に輕くない。

もし、殺生千に及ぶ時は、汝等神罰を蒙るは必定である。されば吾れ、汝等を憐みて、此の度の獵には獲物を授けざるものなるぞ。

されば、汝等にして若し慈悲の心あらば、只今より殺生を止めよ。さすれば其身全かるべきは勿論、子孫亦繁昌するは必然で

ある。

？吾れはこの山に住む釋迦牟尼佛なるぞ

との仰に、長喜明久は拜伏隨喜し

こは誠に有難き御敎へ、我々多年獵を業とし、朝夕鳥獸を殺せども、もとより無知の徒、其の罪と作るを知らず．この上は心を改め、慈悲の限りを盡し申すべし。

只禽獸にも等しき我れ等、何卒兩人が迷ひの程を、詳しく御說き聞かせ給はる樣。

と、口を揃へて申出た。佛は稍ありて容を正し

こは殊勝なる心掛け、さらば願ひの程語り聞かすべし

夫れ人間と言ふものは、竊盜、殺生、邪淫、兩舌等、惡の數を重ぬれば、遂に天の罰免るべきに非ず。之れに引き替へ、慈悲の心深くして、人に施し他を憐み、萬誠に生くる者は、天道の加護を得て福德自ら授かるべし

寺僧の道を說く、此の世に惡を重ぬる者は地獄に落ち、善を積む者は極樂に至ると言ふも、もと是れ、凡夫を善の道に引き入れんが爲めの方便のみ、地獄と言ひ極樂と言ふも、人間五尺の體內にこそあれ、決して他界にあるの理なし。

心誠にして善を積むこと愈々多き者の、人に敬せらるゝ事益々厚く、七珍萬寶四方より集り來りて身を樂ましむるは是れ極樂なり。

心邪にして惡を重ぬる者、人に忌み嫌はれ、其の身呵責に泣くは是れ地獄なり。

汝等心を改めんとならば、此の山より東西に當つて阿彌陀藥師の尊像を安置し、來し方の罪業を拂ひ、善根を積み、行末の幸福を祈るべし。神は必ずや、汝等の罪を赦し、御惠みを垂れ給ふべし。

と御聲の終らぬ間に、早や御姿は、掻き消す如くに消え失せた。暫く御跡を伏拜んでゐた長喜明久の二人は、只茫然として互に目と目を見合す許りであつた。

間もなく曉告ぐる鷄の音が、遠近の村里から聞え初めた。すると、東の空がぼつと白んで、夜は次第に明け離れてゆく。

長い〳〵夢地から、ひよつと目醒めた樣にぼんやりとしてゐた二人は、曉の空を眺めてふと我れに歸り、以後は深く殺生を愼むべきを約し、佛の御教のまゝに、長喜は東の山麓に住ひゐたれば藥師如來を、明久は西の山麓に住ひゐたれば、阿彌陀如來を、安

置念願すべきを誓ひ、西と東に、家路を指して急いだ。

明くれば養老元年、行基菩薩偶々此の地に御立寄りの際、一本の椿を伐つて、阿彌陀如來の尊像を御成就になり、翌二年、藥師如來の尊像をも御成就になつて、安置せられたと傳へられるが、長喜明久の二人は、堅く當初の誓を守り、身を墨染の衣に包んで阿彌陀藥師の念佛に、餘生を送つたと言ふことである。

後傳敎大師、此の地に御立寄りの折、長喜が心を籠めて建立せし法華嶽藥師を、長喜院と號して御堂を飾られ、明久が念願せし川中嶽如來を、明久院と開號あつて御堂を建立せられ、以て今日

に至ると傳へられてゐる。

法華嶽藥師は、寶來寺藥師、米山藥師と共に、和國三藥師の一である。そして今に至る迄、一般の尊崇誠に厚く、川中嶽如來と共に、善男善女の參詣祈願する者、四時絶ゆる事がない。

眞帆嫌ひの權現樣

いつの世の事か、定かには分らぬが、兒湯郡都農町の奥、尾鈴山の中程に、松ノ木平と言ふ處があつて、そこに權現樣が御鎭座になつてゐた。

松ノ木平は、尾鈴山中でもとりはけ見晴しのよい處で、脚下には都農の平野が一目の中に瞰下され、平野の盡くる處には、濱松原の並木越しに、果しもない青海原が望まれた。

權現樣の鎭座地は、松ノ木平の中でも亦一段と眺めのよい處で明け離れゆく村里の朝景色や、火灯し頃の山家の眺めなど、それは〳〵、畫にもし度い位であつた。

別けても、朝晴れの海に搖るゝ白帆や、夕陽を斜に受けた歸帆の眺めは、又格別に美しかつた。

けれどもどうしたものか、權現樣は、大變この白帆がお嫌ひであつた。

風もない穩かな日でさへも、白帆を上げた船が、權現樣の眞ん前と覺しき邊に差掛ると、きつと顚覆した。それは全く不思議な位

であつた。けれども漁師達は、それが、どうした理であるのか氣付かずにゐた。

今日も一ぱい覆つたと言ふぜ

又かい、ひでえなあ

こんな會話が毎日〳〵漁師達の間に繰り返された。

黄昏の濱邊には、運惡くも、こうした災難に逢つて、船具や漁具を流失し、命から〳〵、濡れ鼠になつて上つて來る大の男共が、ついさつきの、恐しい追憶に顫へる體を、家族の者や漁師達に護られて歸つてゆくのを屢々見た。

夕暮れの漁師村に、徳利や油瓶を提げた、海人の娘達が、ひとしきり往き來して、黒い臑をむき出し、荒繩を無造作に腰の邊に卷きつけた漁師達が、のそり〳〵、闇の中を歸つてゆく頃、カンテラの火の洩るゝ伏屋から、白い柩が運び出される事も再々であつた。

それは無論、船の顚覆によつて、溺れた人達の、冷たい亡き軀であつた。

村の人達は、毎日〳〵繰返される悲惨事に、始終おど〳〵して暮してゐたが、こうした災難に逢ふのは、きつと帆を上げた船で

場所は毎も、權現樣の眞ん前と定つてゐるので、人々は間もなくこれは權現樣のお怒りで、白帆をお嫌ひになるのだと氣が付いた。

それからは、帆を上げた船はみんな、權現樣の眞ん前と覺しき邊に差掛ると、きつと帆を下して通つた。

權現樣のお怒りは次第に和いだ。そしてそれ以來、船の顚覆する事はなくなつた。

けれども、權現樣の前を通る度毎に、帆を卷いたり上げたりするのは、隨分と面倒な事柄であつた。で、漁師の人達は、内心ほと／＼困つてゐた。

或るどんよりとした日、その日は、海面に重い黒雲が蔽い被さつて、黒く太い波のうねりが、白齒をむいて襲つて來る怪獸の樣に、海濱に押寄せてゐた。

漁師達は、一人も漁には出なかつた。そうしてこうした日にはどこの漁師達もがする樣に、曲り／＼ねつた濱松の下で、みんな網の手入れに餘念がなかつた。

午下りの陽が、壓ゆる樣な黒雲の切れ間を洩れて射す頃には、人達の顔にはやう／＼倦怠の色が讀まれた。そして四方山の話か

持出された。が、話はいつか權現樣の事に變つてゆいた。

なんといい方法はあるめえか

豆絞りのねり鉢巻に、毛むくの眞黑い足を、だらしなく砂の上に投げてゐた、仲間での利手らしい男が先つ口をきいた。

皆の者は、一樣に、その男の方に眼を注いだが、目と目がビッタリ合ふと、言合した樣に、その目をその儘砂の上に落してしまつた。鉈煙管のさきに燃え上る煙草の煙が、ゆるく地を這い廻つてすぐ上の雲の中に溶け込んでゆく、沈默が暫しの間續いた。

なんと白帆の見ねぬ處にお變りを願はうじやねねか。

眞黑い顔の底から、白い眼の光つてゐる男が、だしぬけに言つた。

皆は期せずして頭を擡げた。そして一樣に贊意を表した。

そこでみんなして土地の選定に取掛つた。そして結局、尾鈴山麓の谷間に申下すことに意見が一致した。

其處は以前の鎭座地に引替へ、四方山にとり圍まれた淋しい處で、落葉をくぐる谷川のせゝらぎと、木から木へ、谷から谷へと渡つてゆく小鳥の羽ばたきの外には、何一つとして、寂莫を破るものとてもなく、無論、海も野も畑も、其の附近からは見られなか

つた。

けれども權現樣は、其處が却つてお氣に召したのか、それ以來都農の沖合では帆船の顚覆する事もなく、船はみな、帆を上げた儘で往き來する事が出來た。

都農町を流るゝ名貫川の川上約一里半、轟の奥の淋しい山間に鎮座ます細神社は、この白帆嫌ひの權現樣で、現在の鎮座地は漁師共が困つた揚句、申下した其の土地だと言はれてゐる。

海の幸山の幸

天孫邇々藝の命に三人の皇子があつた。長兄を火照命、次兄を火須勢理命、末弟を火遠理命又の名を彦火々出見命と申上げた。

御兄火照命は海の漁が大變お上手で、毎日〳〵、濱邊に出ては釣を垂れるのを、此上もないお樂みになさつてゐた。

弟君の彦火々出見命は山の獵がお上手で、山野を馳け廻つては鳥獸を捕つて得意がつてゐられた。

或る日お二人の神様は、海の幸山の幸をお取換へになり、火照命は山に、彦火々出見命は海にお出掛けになつたが、どちらも不得手な幸なので、全く獲物はなかつたのみか、弟の命は釣針を失はれた。

兄の命は、山の不獵をいたく不快に思召され、早速弓矢を弟の命にお返しになり、御自分の釣道具を直樣返す樣にとお迫りになつた。

餘りに性急な御催促に、はたと御當惑になつた弟の命は、釣針を失はれた事の由を具にお物語りになり、平謝りに謝られたが、

兄の命にはどうしてもお聽容れがない。

そこで命は、御佩きになつてゐる十拳の劍をお碎きの上、多くの釣針をお造りになつて償はれたが、兄の命には尙も御承知にならなかつた。

弟の命は更に其の倍數の釣針をお造りになり、色々とお詫になつたけれども、兄の命にはいつかなお聽容れにならず、飽く迄元の釣針を返す樣にとお迫りになつた。

弟の命は非常にお困りになり、どうとかして、釣針を搜し當てたいものとお焦りになつたが、もとよりうまい考案とても浮んで

は來なかつた。

或る日の事、今はせん術も盡き、且は兄の命の理不盡な御催促に困り果てられ、物思はしげに、一人とぼ／＼と濱邊を徘徊つてゐられた。すると其處に、鹽筒翁が通り掛かり、命の曇るお顏を打ち眺め

何を嘆き悲み給ふぞ

と、お尋ね申した。

すると命は、ありし次第を細々とお物語りになり、今は、せん方もなく、かくは濱邊に行き暮れ居る旨お訴へになつた。

命のお物語りに、耳を傾けてゐた翁は

そは容易なることあり、よき計ひ申上ぐべし

とて水の漏らざる籠を造つて、命を乘せまゐらせ

この籠に乘つて參せられよ、さすれば綿津見神の御殿に到らるべし、御神に姫君在し、命の爲によき計ひ仕るべし

と申し上げた。命は非常にお喜びになり、翁に厚く禮を述べ、敎へらるゝまゝに、籠に打ち乘つてお出掛けになつた。

命は果して美麗な宮殿にお着きになつた。そこは案の如く綿津見神の御殿であつて、御殿の門前には一つの井戸があり、井戸の

側には湯津の桂の木があつた。

命がその木に登つてお出になると、間もなく水酌みに出て來た宮女が、井の底に寫る命の姿を見て喫驚し、逃ぐるが如く門内に馳せ入つて、御神の姫君豊玉姫命に、かくとお告げ申した。

姫はさても不思議と、座を立つて表門の方へ進み出で、そつと垣間見られた。

姫は暫しの間、命の姿を窺つてゐられたが、みる／＼、姫の眼は怪しうも輝いた。胸は頻りに波立つて見えた。うら若い娘心に炎ゆる初戀の悶へが微に讀まれた。

御父君綿津見神は、姫の御心をお察しになり、命を門内にお通しになつて、厚く御款待の上、姫のお望みに委せて、御同棲をお許しになつた。

姫のお喜びは譬へ樣もなかつた。そして、お二人の御仲も至極睦じく、お暮しになつてゐたが、そのお睦じい御仲にも、只一つ不審に堪へないことは、命が時折り、思ひ出した樣に、お鬱ぎ込みになる事であつた。

姫は合點のゆかぬこととお考へになつてはゐたが、さりとて、始めの程は、さして、お氣にもお留めにならなかつた。

こうした間に、三年の月日が慌しくも流れ去つた。その頃になると、命のお歎きは、著しく目立つて來た。そこで始めて、姫は命の素振りをお怪しみになり、其の由をそつと父神にお告げになつた。

綿津見神は、さても解せぬ事と、或る日命を側近くお召しになり、其の理をお尋ねになつた處、ここで始めて、命は、この國へお出になつた一部始終をお打開けになつた。

これをお聞きになつた綿津見神は、早速、海の魚を宮殿へお集めになり、嚴重にお取調べになつた處、近頃鯛の喉が變で、食物

が採れないと言ふ事を、お聞込みになつたので、直樣其の鯛をお呼び寄せになつて、お調べになると、案の如く釣針が掛つてゐたので、御神は大層お喜びになり、それをとつて命にお返しになつた。

命は永い間御苦心になつてゐた釣針を得て、非常に御滿足になり、此の上は一刻も早く國へ歸つて兄の命にお返し致し、命のお怒りを解き度いものと、恐る〳〵綿津見神へお申出になると、御神は本意ならずも、命の願ひをお聽届けになり、最も迅速に、お國へお連れ申すものはないかとお求めになつた處、一尋鰐が出て

來て、一日にお屆けしようと申出たので、命は鰐の背に乘り、御神に厚く禮を述べ、宮殿を後にせらた。

命は案の如く、一日で、豐葦原の中國へ御歸着になつた。

× × × × × ×

宮崎郡青島村の海濱は、名たゝる縣南の勝境である。右に紫波洲の廢墟が見えて、左に鬼附女の鼻先が、白波の末に夢と浮ぶ、海岸は遠淺をなして、遠淺の盡くる處には青螺の樣な青島の島影一つ、島の中程からはお宮の鳥居が覗いてゐる。島と陸とを繋いだ橋、その長橋が波上高く架せられる。

島と橋とが振り分ける紺碧の海には、唄が流れる白帆が搖れる陸に松風がつま琴彈けば、濱には小波が撥を合せて寄せては返す青島は確かにお國名所の一つである。

そしてこの濱邊こそ、命が中國にお着きになつて、最初に御上陸になつた處だと言へ傳へられ、その日は陰暦十二月十七日の暮れ方であつたとの事で、今も當日は、青島神社へ參拜する者、一年を通じて尤も多い。

彦火々出見命が青島へ御歸着になつてから間もなく、豐玉姫命も背の君を慕ふて、此の地にお出になつたと言はれてゐて、天下

の奇勝青島の島蔭深く鎮座ます青島神社には、彦火々出見命、豊玉姫命、鹽筒翁が祀られてある。

炎えずの野火

昔百濟の國に、貞家帝と申す王樣が御出になつた。

王樣は、御年四十幾才で、御位を世嗣の福智王にお讓りになつたが、間もなく百濟の國には、非常な内亂が起つて、刻々と危險が王樣の身邊に迫つて來たので、かねて神國と聞食され、常兼お慕ひになつてゐる大和の國に、亂を避けやうとの思召しから、數多の供奉員をお從へにあり、お忍びの姿で百濟の國を後にせられ

た。

百濟の國を落ち延ばれた貞家帝並にお供の人々は、慣れぬ御旅ではあり、殊にはお忍びの身の、木にも草にも心置かるゝ御旅なれば、憂き苦勞も一と通りではなかつたが、長途の旅も恙なく、日數を重ねて、秋も老いゆく陰曆九月の末つ方、安藝の國嚴島に御着船になつた。

紅葉染めなす島の山、小波くぐる鹿の聲、故國無趣の山川に、飽き果てゝゐられる王樣には、晝にもしたく歌にもしたい大和の國の風光は、御旅情を慰めるに充分であつた。

帝は非常に御滿足の面持で、數多の供奉員を引き從へて御上陸になり、隱れ家を求めて、暫しが程は飽かぬ風光を賞でさせつゝ、平和な島の明け暮れを、御過しになつてゐたが、一程經て、追手の勢が攻め來るやの噂を耳にせられたので、今は一刻も猶豫ならずとし、急ぎ旅裝を整へさせ、從者を纏めて、再び筑紫路指して御發船になつた。

船は氣味惡い程靜かな內海を、滑るが如く西に走つた。

人々は皆、次の瞬間に恐ろしい嵐の來るのも知らないで、海路の平安を喜び合つてゐた。

俄然、天の一角に。怪しい黒雲がむく〳〵と立昇つた。人々の面上には、不安の色がサツト漲つた。

すは嵐だ

と言ふ間もなく、斷雲は隼の樣に飛んで、見る〳〵空一面を蔽ひ盡した。今迄靜かであつた海の波は猛虎の樣に吠え狂ひ、雨を交へた烈風は募りに募つた。

あはれ海上に漂ふ扁舟一葉、今は風前の燈にも似て、帝を始め、供奉の人皆生きたる心地とてもなく、あれよ〳〵と泣き號ぶ許りであつた。

風は愈々募り、雨は益々加つた。巨浪はいやが上にも狂ひ立ち船は手毬の樣に揉まれ〳〵て海上に漂つた。

幾日かの後嵐は去つた

船は運よくも沈沒を免れて、日向國臼杵郡金ヶ濱の海濱に吹きつけられてゐた。

帝を始め船中の人達の喜びは譬へ樣もなかつた。

帝は供奉員を引き伴れて御上陸になり、宮居に適當な處はあるまいかと、御索しになつた所、此の濱から西の方七八里の山奥に神門と呼ぶ小邑があつて、其の地こそ宮居に適當な處だと御聞込

みになつたので、早速同地に赴かせ、宮殿を御造營の上お住になつた。

其の後間もなく、福智王も、母君及后と共に、父君を慕ふて御入國になり、兒湯郡木城の鄉比木に宮居を定めてお住居になつた。そして、それから殆ど三年の間は、故國の亂を他處に、御親子仲も睦じく、花に戯れ月に嘯き、至極平和な月日を御送りになつた。

けれども、天はいつまでも、王樣達お二人の身の上に幸を與へなかつた。

百濟國の賊徒共は、貞家帝父子が、大和國に落ち延んでゐられる由聞込むや、どうとかして討ちさらんものと、兵を練り糧を集めて準備をさ〳〵怠りなかつたが、時はよしと見てとつた賊徒共は、大擧して肥前の國唐津に押し上つた。そして貞家帝父子が、日向國神門鄉に在住せらるゝと聞くや、勇を皷して、一氣に攻め寄せた。

かくと氣付いた貞家帝は、僅かの手兵を引率へ、坪谷伊坂山の險に據つて、極力防ぎ戰はれたが、力及ばず、御子華智王は此の一戰に敵の矢に當つて戰死を遂げられ、其他味方の死傷算なき

有様に、帝は恨を呑んで伊坂山の陣地を棄て、途中、小股吐の茅野に火を放つて、追撃し來る賊兵共を、猛火の中に包まんと謀られたが、計畫意の如く功を奏せず、とかくする中、勝に乘じた賊軍は雪崩を打つて攻め寄つた。

王は名木に踏み止り、茲を先登と戰はれたが、勝ち誇る賊徒の勢は凄じく、貞家帝の軍は既に危しと見てとられた時も時、かくと聞かれた福智王は、石川内、中ノ股、渡川、鬼神野方面より兵を募り、手兵を合せて馳せ參じ、敵に當られたれば、さしもに猛き賊軍も、新手の勢には抗し難く、無二無三に斬りまくられ薙ぎ

倒されて全滅し、貞家帝の軍は凱歌を奏した。

けれども帝は、此の戰に於て敵の流矢を受けさせられ、近侍の者の、心盡しの介抱も其の甲斐なく、日ならずしてお崩れになつた。

時は鳥度、葉櫻に逝く春の名殘も忍ばるゝ四月の末、帝が數奇な運命は、茲に最後の幕を閉ぢた。

貞家帝最後の奮戰地である名木に於ては、今に、比木神社御神幸の際、原野に火を放つて、當時の模様を追想するのであるが、不思義にも火は、どんな强風の日でも、原野の一部に炎え盛るの

みで、それ以上に炎え擴がることなく、或る部分を燒き盡せば、ひとりでに消化するとの事で、人皆、世にも不可思議な事どもであると言ひ傳へてゐる。

伊福形の花笠踊

東臼杵郡伊形村大字伊福形の年中行事の一つに花笠踊と言ふのがある。踊子七名、優美な花笠を冠り、袴を着けて、謠と太鼓に合して踊るのである。

いつの世の出來事か詳には知る由もないが、或る年のこと、此の地方一帶に大地震があつた。それは〳〵烈しい地震で、すは地震だと言ひも終らぬ中に、家々の柱は異樣の音を立てゝ傾いた。土壁はひとたまりもなく墜ちた。灰色の空には烏が惶しく

飛び交つた、森と言ふ森の木立は、一齊に葉裏を見せて、目まぐるしく搖れてゐた。人々は驚いて戸外に跳び出した。そして、今しがた森の木蔭で、のんびりと牛の啼いてゐた平和の村は、俄に鼎の湧き返へる樣な騷ぎとなつた。

村の人達は恐怖の餘り、失神せんばかりの有樣で、あすこの木蔭こゝの藪蔭と、三々五々抱き合つて震ゐてゐた。

暫くの後、地震は幾らか治つた。凄い迄に青白い人々の面上にはサツト紅の血潮がさしかけた。が、時も時、遙濱邊の方に當つて遠雷の樣な響を耳にした。

人々は又しても新なる恐怖に襲はれた。

何だらう〳〵

こう言ひながら、顏見合して訝り合つた。人々の面は再び土色に變つてゆいた。間もなく

嘯だ〳〵

と言ふ叫びが、村の端から端へ、瞬くうちに傳はつた。それと同時に、濱邊の部落からは、人々の泣き叫ぶ聲や、牛馬の悲鳴が入亂れて聞えて來た

伊禰形の部落は、再びごつた返しの騷ぎとなつた。そして、それ

は、以前よりももつと／＼悲慘な場面を書き出した。親を求むる子、子を呼ぶ親、老人を背負つて走る者、病者を急きたてゝ逃ぐる者、けたゝましい足音や、泣き號ぶ聲、喚く聲が、入り亂れながら瞬くうちに　裏手の山を、上へ／＼と這ひ上つた。

山の様な海嘯は、家や家畜を浚ひ、田や畑を洗ひながら、恐ろしくも凄じい勢で押寄せて來た。

山上にたどりついた人達は、刻々に攻め寄せて來る海嘯を見下しながら、熱心に天に祈りを捧げた。

海嘯が村を一と呑みにするのも、數秒の後に迫つた。

小供達はあれよ／＼と泣き叫んだ。けれども大人達は見向きもせずに祈りを續けてゐた。

すると間もなく一群の鷗が舞ひ下りて、寄せくる海波の上に浮ぶよと見る間に、遂今迄鋭く寄せかけてゐた海嘯は、見る間にずつと引いてしまつた。

これを見た村人は、喜びの餘り山上で踊りたつた。

伊福形の村は幸にも無難にすんだ。

土地の人達は、これは全く神の御加護だと言つて、祈願就就と將來の平穩を祈る爲に、謠を作り、謠に合して踊りを舞つた。

これが今日伊福形に傳はつてゐる花笠踊りである。

花笠踊りは、毎年舊七月十六日にとり行はれるが、此の日、近郷近在の人出は非常なもので、道と言ふ道は全く人を以て埋められ、淋しい伊福形の部落は、時ならぬ賑ひを呈するとの事である

愛宕大權現の御利益

慶長の昔、秀吉の歿後、嗣子秀頼未だ幼なくして、大老家康の威權、獨振ふ有様に、諸將はひどくこれを憎み、事につけ物に觸れ、爭は絶えなかつたが、憤ほりの發する處、遂に關ヶ原合戰の幕は切つて落され、諸大名の美濃關ヶ原に馳せ向ふ者相次ぐ中に、宮崎郡佐土原の城主島津以久も、其の子藤九郎に留守居の役を申付け、自ら手兵若干を引き卒へて、家康征討の軍に馳せ參じた。

これを見た飫肥の城主伊東祐兵は、佐土原城の虚を突いて、一

氣にこれを攻め落し、領土の擴張を計らんものと、家臣稻津掃部に命じてこれが攻略を策せしめた。

かくと知つた掃部配下の兵者共は、日常鍛ひに鍛ひし腕、見すべき時こそ來れとばかり、劍を磨き腕を撫して、出陣の日を今や遲しと待ち構へた。

愈々出陣の日は來た。掃部が指揮下に兵者共は居並んだ。愈々出發の時が迫つたのである。

朝風に肥馬高く彼方に嘶けば、此方には朝日を受けて兵者共の劍尖が光る。赤銅の樣な其の體軀、ピリともせぬ眞一文字の眉、

戰はぬに先づ敵を壓するの槪がほの見ゆる。

出發の時が來た。掃部が乘馬、其の鬣を一と搖り搖れば、進軍の命は忽にして一下した。

長蛇の如き一隊の武夫が、城門を進出するよと見る間は、歩武堂々、鐵蹄輕く、砂塵を揚げて北へ〳〵と姿は消えてゆく。

當時宮崎城には權藤氏が據つてゐた。伊東勢は先づ宮崎城を奪取すべく進み寄つた。かくと氣付いた權藤氏は、俄に兵を集めて防戰に努めたが、もとより猛り立つたる伊東勢には敵すべくもなく、瞬く內に踏み躙られた

初陣に先づ權藤氏を屠つて、氣勢頓に揚つた伊藤勢は、息をもつがず、一氣に佐土原城へ向つて突進した。

かくと聞いた佐土原城下の混亂は非常なものであつた。城兵の居殘る者とては實に僅少で、とても伊藤勢には抗すべくもない。老幼婦女は色を失つて避難の場所を搜し求めた。

佐土原城の奥まりたる一室では、今し藤九郎を筆頭に、鬼をも挫く荒武者數名、城下の騷ぎを素知らぬ顔に、額を集めて軍議を凝らしてゐる。

或る者は眼を閉ぢ、或る者は腕を組み、或る者は天井を睨へ、

或る者は腕を扼し、甲論ずれば乙透さずこれを駁して形相凄じく論じ合ふ。興奮し切つたる勇士の面上、眼は朱を注ぎ髪は逆立ち氣室内に溢れてゐる。

けれども、僅か數十の兵を以てしては敵の大軍、殊には宮崎城に先づ權藤氏を屠り、破竹の勢を以て攻め寄せ來る軍勢を、喰ひ止むべき名案は、そう容易には見付からなかつた。

藩の家老職町田隼人助は、機略に富んだ才物であつた。彼れも亦其の日の評議に加つて、奇策もがなと頻りに頭を惱ましてゐたが、稍あつてハタと膝を打ち

名案の御座りまする

と口を切つた。居並ぶ者共の眼は一齊に隼人助に集つた。別けても藤九郎は、隼人助が語を繼ぐ間ももどかしく、膝乘り出して聽耳聳て、早う〳〵と急き立てる。

隼人助は流石に藩の重臣、佐土原方の大盤石、些も焦ら立つたる模樣なく

此度の事、敵は多勢にして味方は至つて小勢なれば、所詮對戰の上にては勝算覺束なき處、然る上は敵を術策に陷れ、其の勢を挫くより外に良策とても有之まじ、就ては町内の老幼婦女を

狩り集め、これにそれ〳〵旗柄物を持たせて然るべき處に伏せしめ置き、敵の進入し來たれる時、一時にどつと山上に上げ、薩藩よりの援兵ありと叫ばしめ、陣地よりは聲に應じて敵の退路を絕つべしと叫び返し・敵のたじろく處を無二無三に斬りまくつては

と申出た。藤九郎を始め、一座の面々皆隼人助の奇策に感じ入り戰略は玆に定つた。

隼人助は方略に從て落度なく手配りした。人事は略盡された。此上は天の御加護に依らねばならぬ、かく考へた隼人助は、一と

通りの準備を終へると、急に服裝を改め身を淨めて、愛宕大權現に詣でた。そして

隼人助が七世の子孫を絕たるとも苦しからざる程に、是非敵を擊破せしめ給はる樣

と、心からなる祈願を籠めた。

佐土原方の準備は既に整つた。今は敵の來襲を待つばかりである。

いづれ劣らぬ決死の面々、吾れこそは此一戰に、適れ武門の譽を揚げんものと、長刀引き拔き腕を撫し、敵や後しと待ちあぐみ

たる、吹かば散るべき花の身の、嵐を氣にせぬ雄々しさは、氣高くも尊い限りであつた。

やがて遙に聞ゆる陣太鼓の音、すは敵襲來と呼ばわる聲に、佐土原方は弓矢をつとり長劍提げ、愛宕口に進出して待伏せた。待つ間程なく、愛宕坂上一騎、鐵蹄高く砂塵を揚ぐるよと見れば續いて二騎又三騎四騎、果ては幾十幾百の敵軍雲霞の如く押寄せ來る。

佐土原勢はこゝぞとばかり、敵軍めがけて突込めば、敵もさるもの、立所に陣容を整へて立向ふ。

砂塵天日を蓋ひ、突風颯と木の葉を卷いて過ぐる處、忽にして白兵戰は現出せられた。劍端相打ち、弓箭飛び交ひ、組つ縺れつ、追ひつ追はれつ、双方より起る喊聲は實に山谷をも搖がす許り。

合戰數刻、合しては開き開いては合し、勝敗容易に決すべくもない。時も時、佐土原城のあなた、山上高く一團の黑影動くよと見る程に、豆より寸に、寸より尺に、次第〳〵に近づき來る。長旗高く風に搖ぐを見れば、紛ふ方なき薩摩の紋所

薩藩の應援來る、薩藩よりの應援來る

高く低く遠く又近く、口々に叫び立つるどよめきが、城山颪の間に〳〵、今し鎬を削る戰陣に達した。

すると佐土原方は一齊に聲高く

敵の退路を絕て〳〵

と叫び返す

これを聞いた伊藤勢、たじろく樣の見えければ、佐土原方は茲ぞと許り、勢こんで斬込んだ。

阿修羅の如く、狂ひ立つたる佐土原勢に、伊藤勢は早くも氣を呑まれ、軍容を亂して退き始めた。

隼人助は戰ひの始めより、必死の武者振り雄々しく、立廻つてゐたが、敵の後を見するや否や、敵將目掛けて追ひ迫つた。けれども彼れも必死なれば、敵も亦必死、隼人助は容易に敵に追付べくもあらず、あがきにあがく折も折、天に聲あり

投げ鉾〳〵

と、隼人助即ち手鉾おつとり發矢と投ぐれば、狙ひは些も誤またず、見ん事命中して、敵將はもんどりうつて打斃れた。

これを見た伊藤勢は士氣頓に挫け、南を指して一目散に逃げ失せた。

これより前、退路に當る橋梁は、雀塚の住民の爲、破壞せられゐたれば、伊藤勢は石崎川を渡渉せんとして、稚子倉ケ淵に溺れ死する者過半、其の餘は夜半殘月を踏んで逃げ歸つたが、それは數ふる程であつたと言はれてゐる。

隼人助の奇略は功を奏した、愛宕大權現の御利益は顯著であつた。

今日、愛宕山上鬱蒼たる木の間がくれに、鎭座ます縣社愛宕神社は、當時の愛宕大權現である。そして愛宕神社は軍神として、今に里人の尊崇頗る厚いものがある。

權現樣の御化身

兒湯郡下富田在王子の濱は、一つ瀨川の河口に位する太平洋岸の荒磯である。

往時、此の海濱は波浪殊に高く、海嘯の押寄する事も度々で、其の都度さ程廣くもない王子部落では、家や人畜を攫はれ、田畑は洗はるゝ有樣に、土地の人達はすつかり困りぬいてゐた。

村の人達は、少しでも海が荒れ初めると、どうとかして海神のお怒りを和げたいものと、額を集めて相談したが、もとよりうま

い考案とてもなかつた。

そこで、此の上は、王子の濱崎に鎭座ます、權現樣にお縋り申す外に途はないと考へた。

それ以來、濱が荒れ始めると、村の人達は、王子濱の權現樣に集り、風波を鎭めて頂く樣、心を籠めてお祈りした。

その日は朝から非常な荒れ樣であつた。山の樣な大波が絕えず濱邊に押寄せてゐた。

汀の舟はみな陸に上げられて、松の根元にしつかりと荒繩でいはへられ、恐ろしい嵐の前を思はしてゐた。

王子の濱崎には、いつもの通り、村の人達が全部集つて、權現樣に祈願を籠めてゐた。

海は刻々に荒れ狂つた。風はいよ〳〵吹き募つた。

村人の祈願は尙もつゞけられてゐた。

すると間もなく、純白な一羽の小鳥が、どこからともなく飛んで來て、濱邊に舞ひ下りた。

と見る間に其の小鳥は、双の翼をパッと擴げて、荒れ狂ふ海波を蹴つて、縱橫無盡に翔け廻つた。すると今迄、荒れに荒れてゐた海は、油を流した春の海の樣に、瞬く内に平靜に歸した。

それ以來、王子の濱には、絶えて海嘯の襲ひ來る事もなく、人々は皆、權現樣の御利益を稱へあつた。そして、其の一羽の小鳥こそは、權現樣の御化身であつたのだと今に言ひ傳へてゐる。

王子權現は後に、下富田神社となつたのであるが、附近の人達は、今に權現神社と呼び、靈顯殊に著しいとかで、御祈願をなす者が誠に多い。

狹野の仁王樣

西諸縣郡高原村狹野の里は、東霧島山麓の一小部落で、名高い狹野神社の鎭座地である。

風變りな神社の一の鳥居をくぐつて、天を摩す狹野杉の茂みにこんもりとして射す日の光さへ力ない、爪先上りの參拜道を通り拔け、ひよつと明るみへ出ると、すぐ其處に、雲を突く樣な仁王樣が、行く手を遮るかの樣に、突立つてゐられるのに膽を潰される。

今は昔、此の附近に神德院と云ふお寺があつた。當時仁王樣はそのお寺においでになつた。其頃狹野の里は、毎年毎年大豆の豐作が續いた。

いつの頃にか神德院は廢寺となつた。そして住む人もない山寺は、年と共に荒れ果てて、屋根は落ち柱は朽ち、庭の芒の蔭では狐が泣いたりした。

仁王樣もお寺が荒れると、誰れ顧みる者もなく、谷間に打ち倒された儘幾年かが過ぎた。

其頃になると、豐作つづきの狹野の大豆は、年毎に非常な不作

で、土地の人々は少からず困つた。

すると、誰れ言ふとなく、これは神徳院の仁王樣がお疎末になつてゐるせいだと言ひ出した。

こんなことが言ひ觸らされると、村の人達は口々に言つた。

仁王樣は南洋から御渡來の際、大豆を持つておいでになつた方だと言ふぜ

そうだらうそれに違ひない

これを聞いた氣の早い男は又言つた。

一時も早く何處かへ運んでお据ゑ申そうじやないか

それがいい／＼

皆の者は一も二もなく贊成した。

そこで部落の人達は、力を併せて谷間の仁王樣を抱き起し、現在の所迄擔ぎ上げてお据ゑ申した

すると不作であつた大豆は、其の年から以前の樣に豊作となつた。

此の地方では、今に仁王樣は大豆の神樣だと言ひ傳へてゐる。

櫧の木の怪

東諸縣郡綾村の森山は其の名の樣に、こんもりとした、淋しい森である。

其の森の中に年老いた櫧の木只一本亭々として、半空に聳え立つてゐる。下には小祠二つ、馬頭觀音と弘法大師が祭られてある。

大むかし此の地方が海濱であつた頃には、今でこそ木遣りの聲絕わぬ綾の奥にも男波女波が立騷いで出つ入りつ港の朝夕の賑ひが此處でも見られるのであつた。

其の頃のこと出入の船を繋ぐ爲に渚近くに櫧の杭木を立てた者があつた。すると不思議にも、日ならずして其の杭木から、新芽をふいた。變だと思つてゐる間に枝が出來て葉がついた。

そしてずん／＼成長してゆいた、これが今日森山に殘つてゐるあの樫の木で數千年後の今日迄枯れることがないのだと言ひ傳へられてゐる。

そして尙も不思議な事には、此の木の落葉や枯枝を拾つて、薪とすれば、卽座に神罰を蒙つて、腹痛を起すとの事で、今尙誰れ一人として拾ひ取らうとする者もなく、細やかな枯枝の末迄附

近信者の手に依つて老木の根元に積重ねられてゐる。

こがねの農具

東臼杵郡西郷村田代在の、粕野と言ふ村に、昔、橋本大隅の守と呼ぶ神官が住んでゐた。

粕野は權現山の麓近くの淋しい村で、村人の多くはあり餘る田畑を耕して渡世してゐた。

その多くの田の中に、村の人達が、三隅田と呼んでゐる一坪足らずの田があつた。

不思議な事には、夜になると、どこからともなく、此の田に一

疋の犬が來て、けたたましい聲で吠え立てた。

村の人達は、薄氣味惡い事に思つてはゐたが、誰一人として見定め樣とするものはゐなかつた。

餘りの事に大隅の守は、或る夜、家を脱け出して、三隅田の方へ窺ひ寄つた。其處には矢張り一疋の犬がゐて、毎もの通り吠えたててゐた。

大隅の守は尙も忍び足で近よつた。そして、そつと犬の吠え立てる方向に眼を配つた。

と、權現山の頂とおぼしき邊に怪しい光を認めた。

大隅の守は身震ひした。そして逃げる樣にして我が家へ歸つた。が、恐いものは見たかつた。

明くる日大隅の守は、附近に住む獵師の親分の、九兵衞爺さんを道案內に賴んで、山を分け登り、こゝかしこと搜し廻つた。

方々搜しあぐんだ末、山の頂で不思議な農具が見付かつた。それは黃金で造られて、霧島六社大權現の文字も顯はに彫りつけられてゐた。

これだ！

大隅の守は思はず叫んだ。そして且つ喜び且つ恐れ、其の場所に

細やかな祠を建てて移し奉り、お祭を怠らなかつた。

岩脇村お金ケ濱は、田代から九里餘りも隔たつてゐる太平洋岸の荒磯である。磯馴松青く砂白く、怒濤奔馬と狂ふ有様は、又格別の眺である。

當時お金ケ濱の磯傳ひに、旅する人も少くなかつたが、どうしたものか、白馬に跨つて此の地を通ると、きつと蹴落されるので人皆、霧島六社大權現の神罰を蒙るのだと囁き合つた。

そこで、頂上の祠を山の中程迄申下して、尙もお祭りを怠らなかつた。

それ以後、お金ケ濱の磯傳ひに、白馬の害を被る者はなくなつたが、御神體の黄金の農具は、いつの間にか御鏡に變つてゐた。

霧島六社大權現は、後に田代神社と改稱せられた。そして、御鏡は今も田代神社の御神體となつてゐる。

田代神社の例祭は師走の二十八日である。例祭には盛んな神幸が近在の部落を練つて歩く。そして神輿の前驅は、今も九兵衛爺さんの子孫がこれに當り、神輿が御堂の坂に差しかゝると、九兵衛爺さんの子孫は、三度聲を立てゝ、權現神社を呼び迎ふる例になつてゐる。

三隅田は他の神田と共に、今も田代神社の宮田となつてゐて、毎年七月七日には、宮田植の儀がとり行はれる。この日牛馬數十頭、壯夫鞭を鳴し聲を發すれば、一齊に泥田を蹴つて耕し、終れば男女競ふて苗を植ゑる。此間、神職は列を正し鼓を擊つて神歌を歌ふのである。

寺の迫なる古井には、清泉が湧いてゐる。宮女は其の日、此の水を酌んで飯を炊ぎ、飯櫃を頭上に戴いて神饌を配つてあるく。其の風は遙に古を偲ばせるものがある。

宮田より收獲せる米は、神饌とするのであるが、此の日近郷近

在の男女亦群衆し、時ならぬ雜沓を極めるとの事である。

神女満壽子と榎原様

元和の昔、南那珂郡串間の郷に、内田外記と呼ぶ侍が住んでゐた。治に居ては武士の家の、とりたてて爲す事もなく、さりとて衣食には事缺かねば、悠々自適、時あつては歌俳諧に思ひをやりながら、片山里の明け暮れを妻と淋しくも過してゐた。

こうした淋しみの内にも、月日はとめどもなう流れ〱て幾年かが過ぎた。

元和六年の某月某日、外記の家は蘇つた様な歡びに充ちた。

常闇の國から急に明るい國へ出たかの様に、二人の心には一様に明るい影がさしそうた。

常日頃火の消えた様な外記の家からは、華やかな笑聲が洩れたりした。

一子満壽子が産聲を揚げたのであつた。

食うに不自由なく、衣るに心を勞せぬ迄も、子のない誰れしもが經驗する淡い淋しみは、等しく外記夫婦とても感せぬ譯にはゆかなかつた。

一子満壽子の出生

それは、落葉の森深く徘徊つてゐる様な心の主、外記夫婦を、突然、百花亂れ咲く春の野に誘つた樣なものであつた。

夫婦は天の與へと打ち喜び、はごくみいたはつて成長の日を待ち詫びた。

這へば立て、立てば歩めの親心に絆されて、滿壽子は日一日と成長した

花が開いて凋んで散つて、山の木の葉が黄ばんで落ちて、落ちた木の葉を木枯がちよい／＼巻いて過ぐると、又春に復つて秋が巡つて來る。

滿壽子を得た外記の家は、錦上花を添へた喜びの内に、三年の月日が夢と流れ去つた。

滿壽子もとつて三つのいたいけ盛り、夫婦の愛は日増しに、滿壽子の上に鍾つてゆくのであつた。

その年仔細あつた外記夫婦は、串間の郷からさ程遠くもない榎原の地に移住することになつた。滿壽子も無論伴はれた。

榎原に移つてからも、外記夫婦は平和な月日を送り迎へた。滿壽子は夫婦の愛を身一つに鍾めて日増しに大人びた。

春の花、秋の紅葉、幾度か外記の家に訪れては、いつの間にか

滿壽子の髪は艶々しいお下げになり、いつの間にやら銀杏返しに變つて、落つる木の葉にさへはにかまるゝ十六七も夢と過ぎ、早くも女盛りの十九の春が滿壽子の上にも廻つて來た。

雨にうたるゝ海棠の淋しみはなくとも、星の瞬の廣野の果てにうなだるゝ月見草の憐れはなくも、どこかに潤みを持つた眼ざし漆黑な髮、豐艶な肉付、口數少なに擧措しとやかな滿壽子の姿はいつしか村人の口の端に上つて、行き交ふ人が振返へつて見たりした。

好い子じやないか。

村の人達はこういつて頻りとほめちぎつた。

こうした噂を聞込む毎に、外記夫婦は強い誇りを感ずるのであつた。そして其の誇りは、やがて滿壽子に對する強烈な情愛に變つてゆいた。

けれども福の裏には禍が潜む、月も滿ちては缺けずには濟まぬ運命の神は、早くも其の冷たい魔の手を外記の家に差向けてゐるのであつた。

年の陰暦九月の中ば、裏山を染め拔く紅葉が落日に映えて、泣き細りゆく蟲の音に、秋の哀れのいとど身に泌む夕べ

内田の滿壽子さんは氣が狂つたそうだ

九月九日鵜戸樣へお籠りしての歸るさ、突然發狂して、とりとめもない事を口走るそうだ

こうした噂がパット擴がつた

まああの人一倍おとなしい滿壽子さんが

狐つきだらう

村の人達は、寄るとさはると、こういつて怪訝そうに眼を瞠つた。

滿壽子は狂つた。眞實狂つたのだ

振り亂した黑髮、爛々として人を射る眼光、尋常一樣でないことは直ぐと頷かれた。

娘盛り滿壽子の身の上に振りかゝつたこうした災難は、直ぐと平和な外記の家に暗い影を投げかけた。

滿壽子に對する夫婦の愛が深かつたゞけそれだけ、夫婦の驚きと悲しみとは大きかつた。

どうとかして正氣に復さねばならぬ、復してやりたい、それは眞實心の奥底深く流るゝ親の情であつた。

夫婦は神樣に願もたてた、佛樣を念じても見た。けれども、な

に程の驗めもなかつたのみか、狂態は日増しに募る許りであつた。

秋がだん／＼老いゆいて、庭の公孫樹の葉が、可愛らしい扇を飛ばせる樣に舞ひ落ちる。

するとその葉を下の小川が受けて、凋落の歌を歌ひながら流れてゆく。つい對ひ合せの、半ば坊主になつた大木の頭に、烏がしよんぼり泊つて泣き暮す頃になると、滿壽子の身のまわりには、なにかと解し兼ねる事が增してゆいた。

夕闇の迫つてくる庭先に、空を見詰めて突立つてゐるかと思ふ

と、急に、風もないのに庭の木立がざわ／＼搖れて、突然黑雲が外記の家を包んだりした。そればかりか、暫くすると、今し庭の面に茫然として佇んでゐた滿壽子が、其の黑雲の中に、天女の姿で立現はれ、驚く兩親を尻目に掛け、何事か手振り怪しう合圖をすれば、黑雲は滿壽子を乘せたまゝ、隼の樣に空高く北に飛び去つた。

ものの小一時間も經つと、黑雲は滿壽子を乘せて歸つて來た。と見る／＼黑雲は消え失せて、美しい天女姿の滿壽子は、いつの間にか、行燈の火影搖ぐ奧の一と間に、毎もの姿で座つてゐ

た。

　こうした事が幾度か續いた。其の都度、滿壽子は鵜戸樣にお詣りしたのだと言つて、鵜戸の濱砂を持つて歸つた。

　村の人達はもう、滿壽子の名を聞いてさへ顫え上つた。道ゆく人も外記の門前はわざと避けて通つた。

　滿壽子の身のまはりに起る、こうした不可思議な出來事が募るだけそれだけ外記夫婦の心痛は增してゆいた。

　どうとかして正氣に復さねばならぬ、こうした考へは、つい夫婦の念頭から去る時はなかつた。

　或る日のこと、秋の陽を浴びながら、南向きの縁先に、つくねんとしてゐた外記は、思ひ當ることのあつてかハタと膝を打ち、つと立つて其の儘家を出てゆいた。

　默々として歩いてゆく外記の後姿は、間もなく野道に細つてゆく。

　野道が盡くると、小松原をチラ／＼通り拔けて、松原つづきの山の麓をくる／＼廻つて、其の先きにちよんぼり赤く見ゐる山門の中に、吸ひ込まれる樣に姿は消ゐてゆいた。

　程經て外記は、僧の精能を伴つて歸つて來た。

狐つきだ變化の仕業だ、こう信じきつてゐる外記は、魔拂ひの祈禱をして貰ふつもりだと分つた

精能は滿壽子の部屋に通された。そして讀經怪しく魔拂ひの祈禱を始めた。

すると不思議にも、今が今迄、とりとめもない事を口走つてゐた滿壽子は、急に容を改め、精能の前に進み出で

妾は鵜戸樣の神氣懸りて通を得たるもの、妖怪變化の仕業などとは思ひもよらず、魔拂ひの御祈禱とあらば何卒およし下ださる樣

と、言葉和らに申出た

其の態度、其の言葉使ひ、狂氣じみても見ねざるに、僧の精能は小首を傾け

神通力を得られしとな、然らば御身に問ひ糺すべきことこそあれ

と酬ゆれば

いざなになりと問はせ給へ

と言下に答ふ

僧の精能は然らばとて、心に浮ぶ事、順序もなく問ひ掛くるに

問ひに應じて滿壽子の答ふる所、一として誤りなく寸分の相違すらない。

外記夫婦は顔見合せた。精能も驚嘆した。そして傍らの外記を顧み、世にも珍らしき神女の出現ぞと呟いて立去つた。

それ以來、狂女滿壽子の名は、神女滿壽子として里人に驚嘆の眼を以て迎へられ、吉凶禍福の判斷を乞ふ者が門前に市をなした。

滿壽子の狂態はすつかり止んだ。夫婦を包んだ愁雲は次第にうすれてゆいた。そして再び歡樂の世界が擴がつてゆいた。

神女滿壽子の名は、いつか時の飫肥城主伊東祐久の耳にもはいた。

祐久は、世にも不思議の事のあるものかと、家臣を遣して見つせしめ樣とした

藩臣矢野仁左エ門は、音に聞えた朱子學者であつた。これを聞いて藩主を諫めて言へる樣

世に左樣の道理あるべからず。かゝる奇言をなす者は、世の秩序をば紊るもの、斬首に處せらるゝこそ至當なれ

と、されども藩主容かず、人を派して見せしむるに、噂に違はず

言ふ處的確、一言一句驚嘆に値せぬものはない。

使の者の辭し去らんとする時、滿壽子は水莖の跡も美はに、左の三首の歌を認めて藩主に贈くつた。

赤白の二色のいろを知らされは天道よりの矢こそ當らめ

白露の巳が心をそのまゝにもみちにおけは紅の玉

絹小袖いかなる幹日にたちにけんきる度毎にあわぬつまかも

それ以來、藩主の滿壽子を信ずること頗る厚く、凡慮の及ばない事は、きつと滿壽子に問ふて事を運んだ。

越へて明曆二年、藩主祐久、自ら滿壽子を訪れける時、滿壽子の言ひけるやう

鵜戸神宮は、天照太神以下神武天皇に至る、六代の大神を祀る世にも有難き神社にして、かくも尊き神社を、藩内に有せらる御身の幸福はこの上もないこと、只に御身の幸福に止まらず、御家門の榮譽とも申すべきもの、さればこれを東西に祀り、飫肥護國の鎮守として厚く奉齋せらるべし

と

祐久は實にもと打ち頷き、早速榎原の地に工を起して、萬治元年鵜戸神宮の御分靈を奉して榎原神社を鎮祭し、飫肥の御兩社と

稱へて、尊崇他に超ゆるものがあつた。

縣南榎原の地に、千木高く鎭座ます榎原神社は即ちこれである。そして今に至る迄、榎原神社は鵜戸神宮と共に、西國著名の神社として、縣南を過ぐる者、この兩社に詣でないものはない。

寛文十年三月の十六日、うすら寒い春風が、袂をなぶつては過ぐる夕、天の一角に飛ぶ隕石の樣に、神女滿壽子は五十一才を一期として忽焉として去つた。

けれども神女滿壽子の名は、榎原の神垣の榮えゆくまゝに、永く語り傳へられて消ゆることはない。

そして、榎原神社の境内に祀らるゝ、小祠櫻井神社こそは、神女滿壽子の靈魂が永久に眠つてゐる處なのである

戀の鳥羽樣

黒潮めぐる日南都井の程近く、時あつては流れ寄る椰子の實の一つにさへ、人知れぬ涙の絞らるゝものを、これは又やんごとなき御身の、いつ如何なる運の廻り合せにや、潮路遙かに流させ給ひ、藻鹽燒く寂しき浦に訪ふ人もなく、便り傳へん術もなくて、幾年を鳥羽の君、泣き暮し給ひしと傳へらるゝ戀ヶ浦がある。

浦は漁屋點々、多くは伏屋の軒の朽ち果てゝ、浦ゆく海女の口の端に、折ふし洩るゝ戀唄に、せめて浦人の荒びゆく心を慰する

に過ぎぬ寂しい土地ではあるが、この浦にていつの世か鳥羽樣、都慕ひに慕ひ給ひて、泣き暮し給ひしとの云ひつては、浦の人達の平家の落人なりとの誇りと共に、永く語り傳へられてゐて、浦の背をなす高臺上の小丘には、心ばかりの小祠を建て、船の模型などを藏めて、鳥羽樣御上陸の跡を紀念しまゐらせてゐる。

涙の片袖

薩摩の紋旗靡く佐土原城のむかし、孝女白菊に憐れも深い阿蘇の山里から迎へられて輿入れありし一人の姫君があつた。

年は二八か二九からぬ、花も恥らう顔の、心根もいとど優しくおはしけば、得難き姫と侍女達、なづき侍づき居たりける程に、如何なる仔細のありてにや、殿はいつこうに打解け給はず、果ては日毎に募る亂行の數々、邑從の者の心を籠めての諫言も、殿の心を慰するに由なく、遂には離緣をこそは申付られた。

姫の嘆きは見る眼も憐れ、嫁しては復らざる女の教へ、如何はせんと小さき胸を傷められたが、さるにても覆水は遂に盆に復り難く、切れにし糸の結ぶに由なくて、幾日かの後には從侍一名に守られて、佐土原城下を後にせられねばならなかつた。

素より破鏡の身の、微び姿の旅なれば、乘り物等も思ふにまかせず、昨日に變るけふの身の、餘と云へば餘なる、變り果てける姿をば泣き悲しませつゝ、幾日の、旅を重ねて肥後の國は阿蘇路近くに着かれたが、阿蘇の山家の軒近く、洩るゝ明りの影見ては、又亂れ來る胸の思ひ、一時に心も狂ひけむ、山又山の峠道、今宵

の宿も近しと聞くに、姫ははたと立停まられ

やよ妾、離緣となりて歸らぬは、素より婦德に缺ぐる處あつてのこと、昔堅氣の親の手前、何とて申聞きをいたそうぞ

とて、夜目にもしるき紅袖を、じつと嚙み締め泣かれける程に、從者の者も貰ひ泣き

など左樣のことのこれあるべき

と、宥めんとせし折も折、姫はひらりと身を替し、從者の者のはつとして、片袖とりし時遲く、底ひも知れぬ谷深く、身を投じてぞ失せられた。

後には茫然として突立つ從者の手に、紅に燃ゆる片袖一つ、切れし緣の淚に濡れて、只寂しくも殘された。

從者の者は途方に暮れ、殘りし袖を唯一の、姫の片身と身に着けて、日向路遙かに引返したと傳へらるゝが、切れし緣の片袖は今も寂しく佐土原在の民家に殘り、過しむかしの哀話をば憐れにも城下に止めてゐる。

白馬小町

古墳の名所西都が原の程近く白馬の里にむかし老夫婦が住んでゐた。

菅の根の永い幾十年を浮世の浪に揉みぬかれて、額には數知れぬ皺さへ刻まれ、老い先き短き身の、何かにつけ嘆たれがちな其日〳〵を、せめてもの慰さになつて呉れるものはたつた一人の愛しい娘であつた。

黒く澄んだ眼、整つた顔、皮下に波打つ紅の血は曙の色を

見せて、花瓣のやうな唇は微かな羞恥に顫えてゐる。

こうした娘の美貌は、いつの間にか口さがない村人の口の端に上つて、白馬小町と唄ひ囃され、緣談は四方八方から雨と降りかゝつた。けれども娘はそれ程數多い緣談さへ不思議な位冷やかに斥けた。老夫婦が心を籠めての勸誘も、村の長者の七珍萬寳を積んでの緣談も、つい娘の心を動かすには足らなかつた。

娘のそうした冷やかな態度は、紅い血潮の皮下に波打つべき年頃の娘には、かありに不可解な事であるに違ひなかつた。けれども其娘についてはもつと〳〵不可思議な事が見出された。

それは沈默の夜が漸く白馬の里を去らうとして、曙の色がほんのりと東の空を染むる頃、娘の姿が定つてどこへともなく、狹霧の中に消え失せる事であつた。そして夜の明けきらない前にはきつと、どこからともなく歸つて來た。雨の日も風の日も夜明け前にはきつと娘の姿はなくなつた。それはほんとうに不思議なことであつた。

あまり不思議でならないので、或る朝爺さんはこつそり後をつけることにした。そつと家を拔け出した娘は邊に心を配りながら吸込まれるやうに裏手遙かの森の中に姿を消した。

こんもりとした森はまだ眠りから覺めやらず曉の空に薄れゆく片破月が幽な森の細道を照し出してゐた。葉末を傳ふ曉の風が薄氣味惡い音を立てゝ森の樹立を搖がした。爺さんは轟く胸を押鎭めながら息を殺して娘の後を追うた。

細道がつきて急に明るくなつた。そこには雜草と杉の樹立に包まれた古池一つ、千古の謎を底深く秘めて沈默の夜に抱かれて眠つてゐた。娘はそつと池の中に身を跳らした。と見る間に夜目にもしるく美しい姿を池の中程に現し、瀧のやうに頭から水を浴びるのであつた。

爺さんは樹蔭に身を寄せて・たゞの一動でも見遁すまいと娘の方を見守つてゐた。突然池の水が煙柱を立てゝ空中に跳り上ったと娘の姿は世にも恐しい大蛇の姿となつて水柱の中に現れた。爺さんは失神せん許りに驚いた。そして驚愕に戰く足を踏みしめ踏みしめ轉ぶやうにして我が家に逃げ歸つた

間もなく沈默の夜は白馬の里から遠のいて、曉の光が森の上に輝き始めた。

娘は飄然として歸つて來た。老夫婦は驚きにときめく胸を押し隱しながら、素知らぬ氣に娘を呼んで問うた。

何處へいつとつた?

妾は何處へも……

娘は寂し氣に笑つて答へた。

いへ〱隱さつしやるな

老夫婦は聲を尖らした。

でも妾は……

いへ〱噓を仰やるな……今朝こそはお親父さまが…

夫婦の眼には涙が光つてゐた。娘は失望の色を面に浮べながら

ではお親父さまは今朝程私の跡を……

ねゝ〳〵……老夫婦は聲を落して泣いた。

では妾は今日限りこの家を……娘も泣いた。

幾日かの後……それは青白い月が沙漠のやうな雲の上に憩つてゐる宵であつた。白馬の里を忍びやかに逃れてゆく娘の姿を見た

× × × ×

娘に去られた老夫婦の悲みは他所の見る目も憐れであつた。老い先き短き身の天にも地にも換へ難い、たつた一人の娘の家出は死にも勝る悲みであつたに違ひなかつた。雨の晨、風の夕、葉擦れの音にも、雨滴の音にも、娘や歸ると聽耳を聳るのであつた。け

れども娘の身の上については、梨の礫の音沙汰もなく、幾年かが夢のやうに流れ去つた。

× × × ×

それは何年振りかの秋雨の夜であつた。今し寢に就かうとする老夫婦の門前に一人の旅僧が突立つた。旅僧はやゝあつて門の中に入り戸を叩いて一夜の宿を乞ふた。老夫婦は快よく旅僧の乞を容れ、厚く犒つて秋の夜長をしみ〳〵と語り更かした。夫婦は娘を捨てられた老の身の悲しさを交々旅僧に訴へるのであつた。旅僧は默々として兩人の物語に耳を傾けてゐたが、稍々あつて

然らば此の里は白馬と申しまするぞ

とて、更めて老夫婦に尋ぬるのであつた。

老夫婦は然る旨を答へた。

すると旅僧は、然らば思ひ當る事の御座りまするとて、霧島の奥御池の邊りに、白馬の里より來りたりと云ふ世にも珍らしい美人のある由を聞き知るまゝに物語つた。

老夫婦の眼は異樣に輝いた。

旅僧は明くる朝、東の空の白むのを待ち兼ねて、何處ともなく白馬の里を立去つた

老夫婦は旅僧の物語りに力を得、旅裝もそこ／＼に、二人連れ立つて、其の日の中に霧島山中に旅立つた。

老いの身の幾日かの旅を重ねて、兩人はやう／＼霧島山麓に辿り着いた。そして長途の旅の疲れにもめげず、娘に相逢う嬉しさの一筋に、息つくひまもなく、霧島山の奥深く分け入つた。

兩人は蜩の騷ぐ森を拔け、岩の根を踏んで、幾時間かの後、やう／＼の事で御池の邊に出た。そしてそこにどつかと腰を下した

森とした深山の奥、澄み切つた秋空を水に浸して、池を周る樹立は其影を逆まに浮べ、じつとみつめてゐる兩人の魂は、憧のや

うな湖心に吸ひつけられるやうな心地さへするのであつた。夫婦は不安な思ひに顔を曇らせながらも、池の邊りに平伏して、口を揃へて娘の名を呼んだ。兩人の叫び聲は死せるが如き池の面を掠めて、遙の木立にこだました。

と、池の中程と覺しき邊りに突然水泡立つて、愛らしい娘の姿が立現れた。

夫婦は水際に乘出して嬉し泣きに泣いた。がそれも束の間、娘の姿は忽ち掻き消す如くに消え失せた。

夫婦は又も聲を揃へて娘の名を呼んだ。再び娘の姿は現れた。

が言葉を交す暇もなく、姿は又も消え失せた。

夫婦は三度聲を限りに娘の名を呼んだ。と、今度は湖心と覺しき邊りに水煙立昇り、みるからに恐ろしい大蛇の姿が現れた。そして黑雲は飛び醒風は吹き荒んだ。老夫婦は吃驚仰天し、息せき切つて山を馳せ下り、無我無中に夜を日についで我が家を指して逃げ歸つた。我が家の門前迄逃げ延びた時、兩人はついてゐた杖をどつかと土の中に突きさして、其儘そこに悶絶した。

白馬在に今日半空を蔽うて聳え立つ老公孫樹は、この老夫婦の杖であると語り傳へられ、不思議にも杖其儘の形をなしてゐる。

娘が浸つたと傳へらるゝ古池は星移り物變り、今は當時を忍ぶよすがもないが、尚且白馬在に名のみの形を留め、謎の池として語り傳へられてゐる。

逆鉾の祟り

千早振る神代のむかし、諸神達天降り給ひしと聞く高千穗の峰淀の河水澱みなく、物古り星は移れども、降らす奇し火に變りなく、謎の深山の奥深く、解かれぬ謎の秘事を數限りなくも殘してゐる。

皇子川原や祓川、産婆石、血捨木、狭野原など、神代の靈地は申すに及ばず、人喰う谷の地獄谷、馬の背返し馬返し、大蛇棲むその四十八池、それ／＼に傳說は殘されてゐるが、謎の御山の

頂高く、風霰雨打、いつの世よりか突立つてゐる天の逆鉾にも御多分に洩れない口碑が傳つてゐる。

天の逆鉾の由來は說かず、天孫降臨の古事に思ひ及んで、只なにとなう物戀しう覺ゆるに、この逆鉾、如何なる因緣の廻り合せにや、餘程淚多い方と見え　時に千古の靈山を踏破る登山者の誰かが、この天の逆鉾にお觸れ申すことがあると、忽ち謎の御山に黑雲湧き、雲は更に風を呼んで、大雨沛然として至り、狹野の渡りにお怒の雨を降らし給ふとか。

そこで麥伸ぶ頃、狹野の邊りに陰雨降續くことがあると、又誰

れかが御觸れ申したと云ふので、屈强な靑年數名、雨を衝いて山上に至り、逆鉾を正しく御直しする。

すると黑雲は忽ち四散して一天からりと霽れ、和やかな日本晴となるとの事で、山麓の人達はその御怒りを恐れて、決して逆鉾に觸れることをしない。

戀の祖母様

むかし西臼杵郡の片田舍に鹽田と呼ぶ山里があつた。鹽田は祖母嶽の麓に近い淋しい山里で、山は屛風を引廻したやうに立塞がり、其の切れ目〳〵を縫ふて谷川が喘ぎながら流れてゐた。

春は後れて此の村に來た。そして秋は一足前に此の里を訪れるのであつた。

曲り紆つた谷川は小松の這つた野つ原や、こんもりとした常盤樹の森に吸ひ込まれたり吐き出されたりして走つてゐる。壓し潰

されたやうな土人の家が其の縁に沿ふてポツリ〳〵望まれた。其の中に只一つ冠木門の門構嚴しく王者のやうに聳え立つてゐる一軒の家があつた。そこには白い土藏も光つてゐた。そして土藏の上には白い鳩さへ平和の表象のやうに舞ひ下りてゐた。村の人達は此の家の主人を鹽田樣と呼んで格別の尊敬を拂つてゐるのであつた。鹽田樣は近郷での名門であつた。そして又界隈切つての物持ちでもあつた。

こうした鹽田樣にも尚も一つの誇りがあつた。それはたつた一人つきりの愛しい娘が世にも珍らしい美人であることであつた。

二十歳にはまだ間もあらう、濃く長く引いた眉、その眉の奥深く大空の星のやうに晴やかに輝いてゐる瞳、ふつくらとした双頬にこぼるゝ愛、羞恥を含んだ口元、それは若人達の赤い血潮を高鳴らしむるに充分であつた

娘の噂は次第に國中に擴がつてゆいた。そして我れこそは三國一の婿殿とばかり甘い華やかな歡樂を夢みながら遙々鹽田の里を訪れて來る若人も少くはなかつた。けれどもこうした人達は日ならずして冷たい戀の亡骸を抱いて寂しそうに鹽田の里を立去つてゆくのであつた。一人又一人昨日も今日も又明日もそうした若い

男達の傷ましい姿を見た。

× × × ×

それは夏の初めであつた。夏とは云へやつと今春が鹽田の里を立退いたばかりなので、時候後れのこの土地にはまだあちこちのだんだら畑に小麥が青い波を打たせて伸んでゐた。

けれども流石に山や野や丘や杜の總ては深緑に萌えて、明るい初夏の色彩が野にも山にも漂つてゐた。そして滲み入るやうな赫土の臭ひがわけもなく人々の心を人なつこい思ひに浸らせるのであつた。その初夏のとある夕、低く垂れ籠めた夕靄のあなたに遠

い灯が夢と浮いて、喰入るやうな寂しさが心の奧深く通ふ頃、滴るやうな水色の直衣に身を包んだ一人の若い男が人目を憚りながら鹽田樣の門の中に吸ひ込まれてゆいた。

男の姿は間もなく裏庭の方に搖れていつた。

夕闇は杉の樹立の間から次第〳〵に庭一面に這ひ擴がつてゆいた。そして夜の幕は靜かに下りかけた。然し男は其處を立去らうとする樣子は見ねなかつた。

間もなく空には星がだるそうに光つて來た。山の村は次第に更けて、やがて深い眠りに落ちてゆいた。がその男は尙もそこを立

去らうとする氣配は見えなかつた。

やがて東の空がボッと白んで朝靄が濃く薄く山の村を包んでゆく頃、その朝靄の中を忍びやかに歸つてゆく男の姿を見た。

それ以來夕暮れにはきつと男は女を訪ねて來た。そして夜明け前にはどこともなく忍びやかに歸つてゆくのであつた。けれどもどこから來て何處に歸つてゆくのか其の娘にさへあかさなかつた

娘を廻る不審な影は、いつしか母の目にも止つた。そして或る日の事母はそつと娘を呼んでそれとなく男の事を問ひ糺した。

けれども娘は事實男に就ては何事も知らなかつた。

娘は辛うじて事の次第を母に訴へた。そして寂しさうに涙に光つた眼を疊の上に落すのであつた。

その寂しく傷ましい娘の姿を見ては母はそれ以上、その事に就て問ひ糺したくはなかつた。で只今宵男の訪ね來し時針を襟の邊りに刺し糸を附し置け、さすれば男の行方を知り得るのであらうと告げて立去つた。

明くる日の夕方男は案の如くやつて來た。娘は母に敎つた通り男の襟首に針を貫き糸を附してその端を小田卷に結び付けて置いた。翌くる朝男は毎もの通り薄暗い中に歸つてゆいた。糸は小田

卷の廻るにつれてどこ迄も〳〵續いてゆいた。

間もなく東の空が茜して朝の光が戸の隙間を忍んで流れ込んで來た。庭の木の葉は眞赤に染つてその間を雀が嬉しさうに飛び廻つてゐた。朝の光を喜ぶ村人のどよめきが次第に村中に擴がつてゆいた。

娘はガバと跳起きた。そして一人の女中を伴れて一途に糸の行方を追ふた。

糸は野を越へ谷川に沿ふて次第に深山の方に消えてゐた。

その奥はもう祖母嶽の麓であつた。無論その附近には人家とて

はなく、辛うじて通り得る山道は双方から差し交してゐる杉の茂みで眞黒く、生温い濕つぽい山風がいやに二人の鼻を突いた。けれ共狂へる娘の前には何者もなかつた。娘は尚も一目散に糸の行方を追うた。

そこはもう祖母嶽の二三合目であつた。その附近からはだら〳〵と麓迄續いてる綠の傾斜地が瞰下され、その盡くる處には赫びた丘が幾重にも〳〵重なり合つてゐるのが見られた。

眞夏の日は大地の一切を灼き盡すべき威力を見せてその上に輝り輝いてゐた。裾野を彩る青葉の森はその日を受けてキラ〳〵と

輝いてゐた。處々に浮き出てゐる茶褐色の岩や灰色の石塊や芝草はその日の下で喘いでゐた。

二人は汗ばんだ体と疲れ切つた重い足を岩の根に止めてそつと行く手を見上げた。と直ぐその先きに老松のぬつと立つてゐる大きな岩が目に止つた。そしてそこには大きな洞穴が出來てゐた。糸は正しくその穴深く引込まれてゐるやうであつた。

あそこよ

二人は小さく然し力強い聲で言つた。張りつめた二人の心は一時にどつとゆるんだ。けれども又こんな處にと思ふとすぐ其の

後には堪へ難い恐怖が劇しく二人の心を掻き亂した。けれどもそれも束の間、次の瞬間には二人は幾らか捨鉢になつてゐた。

娘は轉ぶやうにして穴の口に走り寄つた。そして男の名を呼んだ。けれども穴の中からは何の應へもなかつた。

娘はおど／＼した眼を再び糸の上に落した。けれども糸は確に穴の中に引かれてゐた。そして穴の中からは幽かな呻き聲さへ洩れてゐた。

娘はもう何の躊躇もなしに叫びつゞけた。妾は鹽山の娘で御座います遙々此の山深く主を尋ねて參せしもの、せめて一度なり

と御姿を御現し遊ばしますやう

娘の叫びは眞黒い洞穴の中の重く濕つぽい空氣を搖つて底深く傳つてゆいた。

と、奥からは始めて聲があつた。

これは／＼誠にお優しき心根、されど余れは御身に御見せすべきやうの姿にはあらず、遙々尋ね來し主をこの儘歸さんは心許なけれど、これも宿世の縁と諦めて急ぎ引きさられよ

其の聲は低く幽かであつた。そして又途斷へ／＼であつた。

娘は轉ぶやうにして打ち伏した。そして白魚のやうな兩手を美

しい顏に押當ててよゝとばかりに泣いた。

洞穴の中から洩るる幽かな呻き聲は次第に細く小さくなつてゆいた。

午下りの陽は人里離れた山の岡を赫々と輝してゐた。樹々の葉や芝草や石塊や黒ずんだ岩や總てのものは其の日の下に喘き疲れて沈黙を守つてゐた。朝の間嬉しそうに飛び廻つてゐた小鳥も翅を收めて聲を呑んでゐた。その山の靜寂の中に娘の歔欷のみが憐れにも聞かれるのであつた。

暫しの後娘は雲つた面を上げて悲しそうに言つた。

これは又何と云ふお情けないお言葉で御座いませう。假令如何やうのお姿で御座いますればとて、何の御氣兼ねの御座いませう。

遙々此の山深く主を尋ねて參りし妾、せめて只の一度なりと御姿を御現し遊ばしますやう

その恨むが如き娘の叫びは再び穴の奥深く傳つてゆいた。と穴の中からはのそり〳〵と物の這ひ出る音が洩れて來た。そして幽かな呻き聲が次第に太くなつて來た。

二人は瞬きもせずに穴の中を見守つた。

と、突然その眞黑い穴の奥にキラ／＼輝く二つの光を見た。二人は思はず尻ごみした。そして心臟は高く波打ち全身の血は俄に逆流するのを覺えた。

　呻き聲はつい穴の口まで來た。そして直ぐ恐ろしい怪物の姿が目の前に現れた。耳は長く垂れ下つてゐた。眼は炬火のやうに光つてゐた。それは世にも珍しい大蛇であつた

　大蛇は底知れぬなつかしみのある表情で娘達を見た。そして柔和な然しどこか淋しみのある微笑を見せた。娘達の心は次第に平靜に復つてゆいた。嵐の後そつくりの靜けさが二人の心を柔ら

かに包んでゆいた。

　大蛇は靜に口を開いて言つた。

余れこそ御身の主にして又此の山の主祖母嶽大明神なり。主戀しさの餘り、姿を變へて夜毎に通ひけるを、昨夜首の邊に刺されし針の跡の痛み劇しければ最早餘命も長かるまじ。只假初の契にはありつれど、御身は己に已れの胤を宿し居れば、やがて月滿ちなば出產すべし。そは男の子にして長ずれば筑紫の勇者として武名を轟かすべければ已れに見かへて愛し育てらるべし

と、語りも終へず悲しそうに眼を閉ぢた。

大蛇の面には安堵の色がさつと漲つた。そして最後の微笑を娘達に與へながら息を引きとつた。

娘は傍に伏して涙の乾く迄泣いた。

西に臼づく夏の入日は山の春を眞赤に染めてゐた。孔雀のやうな夕燒雲が西の空高くふはり〳〵と浮いてゐた。二人はやがて麓から襲つて來る夕闇の中を泣く〳〵下つてゆいた。

夕日は全く西に沈んだ。戀の御山は謎のやうなローマンスを深くも秘めて刻々に夕闇に閉されてゆいた。娘は山の姿が全く闇の中に沒する迄幾度も〳〵振返つて見た。

いつの間にか二人は里近くの野道を歩いてゐた。そこには二人の歸りを待ち詫びた母の姿があつた。

娘は母を見るなりいきなり走り寄つてわつと其場に泣き伏した母は事の意外に驚いたが、兎も角も扶け起して家へ連れ歸り色々と宥め賺して事の由を問ひ糺した。娘はありし次第を細々と涙ながらに物語つた。

母の驚きは一と通りでなかつたが、それでも強て平氣を裝ひながら

祖母樣の御申子ならば何より芽出度く嬉しい事ではないか何の

嘆き悲しむ事があらうぞ
と泣き狂ふ娘をいたはり慰めた。

× × × ×

いつの間にか野山は秋の裝ひを凝らしてゐた。桐の一と葉を先立て、秋は鹽田の里を訪れた。野には色どり〳〵の秋草がうなだれ咲きその蔭には悲しげに様々の虫が秋の歌を歌つてゐた。娘は奇しくも破れ果てし幻の戀に立つ秋風の寂しさをしみ〴〵と感じながら紅の小袖を霑すことも屢々であつた

秋もやう〳〵老いゆいて、泣き盡した秋の虫の殘骸があちこちに築く枯葉の山に盛られると、やがて山の國の冬がやつて來た。その寒い冬のとある日に娘は玉のやうな男の子を產み落した。頑丈なむく〳〵とした見るからに氣持のよい子であつた。そしてその子は生れながらにして驚くばかりの强力であつた。

× × × ×

月日は流れ〳〵た。子供は日増しに成長した。そして後には祖母嶽大明神の御告げの通り筑紫の勇者として其の武名を唄はれた

大正十一年十二月二十日印刷
大正十二年一月一日發行
大正十三年九月五日印刷
大正十三年九月二十日發行
【増訂改版】
定價金五拾錢
（郵稅四錢）

不許複製

亡びゆく日向の傳說

宮崎縣宮崎市大字上別府九百二十一番地
著作者
發行者　小山文雄
印刷者　日高光男
宮崎縣宮崎市大字上別府三三四〇

發行所　日高印刷所
宮崎市上野町一丁目
電話一三八番

291
809

終